伝えたい

まちの遺産

国史跡　杣山城跡

二、よみがえる中世の館

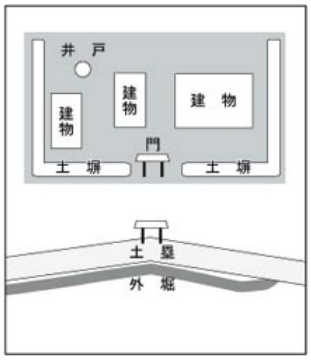
杣山の麓に広がる阿久和谷の中央には、かつて立派な城門を構えた城主の館がありました。城の廃城とともに廃棄され、永い年月を土の中で眠り続けた館が、発掘調査によって現代によみがえりつつあります。

館は阿久和谷中央の支谷のひとつに築かれていました。城下の集落から少し奥まった場所にあり、背後には杣山がそびえ立っています。山頂の山城を仰ぎ見ることができる位置に建てられていたのは、緊急時にそなえ、狼煙等でお互いに連絡の取りやすい位置関係を考えてのことでしょう。山頂から周囲の様子を監視し、何かあればすぐに麓の城主に伝えられたと考えられます。

館のある谷の入口は、「一ノ城戸」と呼ばれる土塁と水堀に護られていました。この土塁は全長約一〇〇m、高さ約三mあり、前面に約五段分の石積みを備え、今も威風堂々たる姿を見せています。土塁の真ん中には道路状の凹みがあり、この凹みが敷地内への入口であったようです。

山城と居館の位置関係

「一ノ城戸」の奥には、山の緩斜面を削って人工的に造成した平坦面があります。この場所には「大屋敷」の字名が残り、古くから城主の館があったと伝わる場所でしたが、平成11年度から行われた発掘調査では、門・塀垣、礎石建物、掘立柱建物、石列、石組みの井戸、素堀の溝など、館に関する多くの痕跡が発見されました。特に、建物の周辺や溝の中から大量の土器の破片がまとまって見つかったことは、これから館の存続した年代を検討する上で貴重な資料になると言えるでしょう。また「大屋敷」地区のさらに南側の「西ノ谷」地区では、小さな平坦面で礎石建物と越前焼の大甕の破片がたくさん見つかりました。館の裏手になるこの場所では、倉庫のような建物が建ち、越前焼の大甕で水や食料を貯蔵していたと推測されます。



「大屋敷」地区イメージ図

このように、たくさんの成果を上げた発掘調査は平成17年度をもっていったん終了しましたが、今後は守護大名の館の真相を解明すべくさらなる調査・研究を進めていきたいと考えています。

伝えたい

まちの遺産

国史跡　杣山城跡

三、遺物は語る

居館跡では、過去6年間の発掘調査で14万点を超える土器・陶磁器などの遺物が見つかりました。完全な形で見つかるものは少なく、ほとんどが小さな破片ですが、じっくり観察してみると、中世の人々の生活が目に浮かんできます。

居館跡で一番多く見つかったのは、「かわらけ」と呼ばれる素焼きの土器です。この土器は儀式や宴会で使用されたり、夜間に建物内の明かりを採るための灯明皿として使用されたりしていました。儀式や宴会で使用したものは縁起を担ぐのか一度使用したあとすぐに廃棄していたようですが、灯明皿のほうは皿の縁に満遍なくススが付着しており、灯芯を移動させて何度も使用していたことが伺えます。

地元産の越前焼は、中世では生活用品である壺・甕・擂鉢の3種類を生産していました。居館跡でも、特に建物があった「大屋敷」地区や倉庫があったと推定されている「西ノ谷」地区で、擂鉢や大甕の破片がたくさん見つかりました。擂鉢はどれも擦り目が摩耗してわからないほどよく使い込まれており、灯明皿の件と併せて考えても当時の人はモノを大切に扱っていたようです。また、大甕は少なくとも6個体以上あったことが確認されています。そのうちのひとつだけ形がひどく歪んでいることがわかりました。製品としてはあきらかに不良ですが、穴があいていなければ甕として使用するにはまったく問題がないため、少々形の悪い甕を安く買って経費の節約をしたのかもしれません。

その一方で、中国からの輸入品である高価な陶磁器も多く見つかっています。主なものとしては、青磁、白磁、天目茶碗があげられます。これらは日常的に使用するのではなく、観賞用の座敷飾りとされていました。このような高価な陶磁器を所有することが、城主としての権威を示すひとつの手段であったと考えられます。館を訪れた人々は、通された座敷に並ぶ陶磁器を見て、館の主人に対する畏敬の念をますます強めたことでしょう。

この他には、瀬戸美濃焼や石製品、鉄製品なども見つかっています。特に文房具のひとつである瀬戸美濃製の水滴（水差し）や茶道具である天目茶碗、碁石が見つかっていることから、戦のない時期の城主は和歌を詠んだり囲碁を楽しんだり、お茶を点てたりして優雅なひとときを過ごしたことが想像できます。

このように、中世の人々が遺した土器や陶磁器は、現代の私たちに当時の生活の様子を垣間見せてくれます。居館跡から出土した遺物は14万点以上。今後の調査や研究で、また新たな発見があることでしょう。

越前焼・大甕

碁石

土器・陶磁器類

伝えたい

まちの遺産

旧国華小学校
―ふるさと資料館としての再生―

南条地区の脇本に、平成14年10月にオープンした資料館があります。この資料館の名前は、ふるさと資料館「国華」。元は明治初期から昭和中期まで開校されていた小学校でしたが、建物の老朽化に伴って解体される際に一部が移築され、資料館としての新しい生命を吹き込まれました。

移築されたのは、大正11年に建てられて体操場（体育館）として利用されていた建物の一部で、元の建築部材をできるかぎり使用して移築されています。体操場の正面には児童昇降口（玄関）がついており、この昇降口が現在、資料館の出入口となっている部分です。昇降口はアーチ型をしており、腰の高さまでレンガを積んでその上に横板を張った正面柱や、漆喰塗りの壁などが見られ、当時としては洋風意匠のなかなか斬新なデザインだったのではないでしょうか。

体操場内部は天井がなく、約4メートルの高さがあるトラスの小屋組をそのまま見ることができ、豪快な空間を感じるとともに大正時代当時の建築技法を知ることができます。

主な展示品としては、廃校になる直前の学校全体を表現したミニチュア模型があげられます。子供たちの学舎であった校舎は3棟あり、南校舎は明治36年、北校舎は大正11年、新校舎は昭和17年に建てられました。それぞれが違う時代に建てられた校舎は、よく似た建築様式を持っています。しかしながら、時代が下ることに教室が広くなったり、小屋組が南校舎では和小屋なのに対し、北校舎・新校舎ではトラス工法を用いたりなど、時代によって多少の変化も見られます。このように明治・大正・昭和の学校建築の様子や建築様式の変遷などを直に比べて見ることのできる例はめずらしく、建築資料としても大変貴重なものでしたが、残念ながら校舎はすべて取り壊され、今は展示されているミニチュア模型と写真資料がそれらの特徴を伝えています。

その他には、江戸時代まで使用されていた民具や、国史跡・杣山城跡をはじめとする町内の遺跡から出土した土器・陶磁器などを展示しており、名前の通り「ふるさと」に密着した資料館として運営されています。これらの展示品は一般に公開されているほか、地元小学生の社会科見学にも利用されていて、子供たちの学習の場としての役割も失ってはおりません。

明治5年に定められた「学制」によって開設された旧国華小学校。昭和39年に廃校となるまで旧南日野村の子供たちの想い出を刻んだ学校は、現在、移り変わった時代の中でまた新たな歴史を刻んでいます。

新旧の国華小学校

伝えたい

まちの遺産

特務艦「関東」の遭難
―吹雪の夜の温かい人間愛―

河野地区の糠、海岸道路に面した公園に、高さ約3・6メートルの慰霊碑が建っています。ひときわ目を引くこの慰霊碑には、かつてこの近くの海で遭難した日本海軍の特務艦と村の婦人たちにまつわる哀しくも温かい人間愛の物語が刻まれています。

明治33年デンマーク生まれ。ロシアの輸送船を経て日本海軍所属となった特務艦「関東」は、任務で山口県徳山港から京都府舞鶴港へ向かう途中激しい吹雪に遭い、進路を見失いました。嵐の海を彷徨うあいだに入港予定であった舞鶴港は通り過ぎ、気づいた時には越前海岸糠浦の岩礁が目の前に迫っていたといいます。進路を変更するも時すでに遅し。そのまま突き進んだ「関東」は、不気味な轟音とともに泡立つ岩礁に衝突し、傾いたまま動かなくなりました。大正13年12月12日、午前8時5分のことでした。

座礁した「関東」を最初に見つけたのは、近くの集落に住む登校途中の小学生でした。彼らは慌てて来た道を戻り、集落の大人たちに自分たちの見てきたことを伝えます。しかしながら、冬の集落ではほとんどの男たちが杜氏に出ていて不在であったため、留守を預かっていた女たちが救助の中心となりました。

沈みゆく「関東」から逃げ出し、荒れ狂う極寒の海を泳いできた凍える兵士を浜に引き上げ、自らの肌で温めて蘇生させる。そこには人前で裸になることへの羞恥心はなく、

「消えゆく生命を何とか救いたい」

彼女たちの心には、その一念のみがあったのです。

このような女たちの献身的な看護によって救われた兵士は、30余名。その陰で、どうしても生き返らずに亡くなっていく兵士も数多くいました。自分の息子のような年齢の若い兵士の生命が失われていくのを見て、女たちは助けられないことを涙を流して悔しがったそうです。

あの日から80年以上が過ぎ、特務艦「関東」の遭難事故はもう遠い過去の出来事となりました。遭難現場に駆けつけて救助にあたった人たちは、もう誰も居られません。当時を知る人はいなくなりましたが、殺人事件のニュースが氾濫する殺伐とした現代だからこそ、このような心温まる逸話を歴史の影に埋もれさせることなく後世に語り伝えていく必要があるのではないでしょうか。

遭難事故が起こった次の年、糠区の通称「エーベスト山」の中腹に慰霊碑が建てられました。後年、その慰霊碑は遭難現場近くの海岸沿いに移され、新たに完成したレリーフとともに当時の惨状と婦人の愛を訪れる人に伝えています。そして、あの日97名の生命を呑み込んだ海を静かに見つめています。

▲遭難した特務艦「関東」

▲慰霊碑とレリーフ

伝えたい

まちの遺産

湯尾峠
―北陸道の合戦と孫嫡子信仰―

湯尾峠一帯は、古代の官道・北陸道から現代の北陸自動車道にいたるまで、北陸の主要幹線が集約している交通の要所です。歴史的合戦の舞台となった城跡や、孫嫡子信仰の発信元としてにぎわった峠の茶屋跡など数多くの史跡が残っており、文化庁「歴史の道・百選」にも選ばれています。

湯尾峠は、八ヶ所山から東に細長く突き出た尾根の標高約二〇〇ｍに位置しています。山麓は谷幅が狭く、日野川がＳ字状に蛇行して流れているため、今庄から湯尾へは必ずこの峠を通りました。天正六年（一五七八）柴田勝家が北国街道を整備した時、石垣を組み道幅を広げる改修が加えられて現在の峠道になったといわれていますが、現ルートの東側には源平合戦の時代、木曽義仲が京へ攻め上がる際に切り開いたといわれる古い峠道（義仲道）も残っており、南北朝時代の合戦、一向一揆の戦いなど度々戦場となった場所でもあります。

①上野ヶ原古戦場跡 ②血頭池 ③馬の水呑場 ④ご勝井跡 ⑤湯尾城跡 ⑥峠の茶屋跡・孫嫡子神社 ⑦一里塚

峠の標高差は一〇〇ｍ程で、やや急な坂道ですが、道幅が広く比較的登りやすい道です。ゆっくりと十五分ばかりで頂上付近まで行くと、目の前に石垣が現れ道がつき当たり、直角に折れながら進むと頂上の茶屋跡に着きます。石垣は湯尾側で一段、今庄側で二段に組まれており、茶屋の構えというより城や砦としての面影が感じられます。

頂上の高台には疱瘡の神を祀る孫嫡子神社があり、四軒あった茶屋では厄よけのお守り札が配付されていました。江戸時代の文人、松尾芭蕉、井原西鶴、近松門左衛門をはじめ、数々の紀行文、文芸作品にも登場していることから、孫嫡子信仰と峠の茶屋は全国的に知れ渡り、大いに繁盛していたことがわかります。

湯尾峠の変遷

1183年 木曽義仲軍、日野川をせき止め燧ヶ城で平家軍と対峙（**義仲道**）
1336年 杁山城主・瓜生保、湯尾で足利軍に勝利（**上野ヶ原古戦場跡**）
1578年 北ノ庄城主・柴田勝家が現在の峠道へと大改修を行う（**北国街道**）
1878年 明治天皇北陸御巡幸、湯尾峠を通過（**ご勝井跡**）
1896年 鉄道開通、峠の通行が減少し茶屋下山（**湯尾トンネル**）

◀茶屋で配られた厄よけのお守り札（印影）

▲江戸時代に描かれた峠の茶屋（「湯尾峠」『二十四輩巡拝図絵』）